練馬区立大泉中学校　　学校だより

大泉

「人は学ぶ」
「人は変わる」
「人は輝く」

１２月号
令和５年１２月２５日
発行者　新村　紀昭
編　集　相川　直綱

充実した冬休みに向けて

全力・継続・不屈

師走を迎えましたが、「小春日和」ではなく「小夏日和」と言われるほど季節外れの暖かい日もありました。インフルエンザの流行も依然として続いており、体調の管理を十分にしていきましょう。

さて、いよいよ2学期が終わりますが、この1年を振り返り、皆さんは自分自身を成長させることができたでしょうか。先日の三者面談の内容をもう一度振り返り、この冬休みを有意義に過ごしてほしいと思います。

そこで、新春を迎えるにあたり、さらに自分を成長させたいと考えている人に、3つのキーワードを贈ります。

① 「全 力」

既にいろいろな先生からも言われている内容だと思いますが、定期考査や部活動の試合など、大事な時こそ手を抜かず、「全力を尽くす」ことが重要です。理由は主に3点あります。

まず1点目は、全力を尽くせば「自分の課題が明確になる」ということです。全力でやらなかったからできなかったという場合、できなかったのは「手を抜いた」からなのか、「目標をあいまいにごまかした」からなのか、他に原因があるのかわからないままになってしまいます。全力を尽くしてもできなかった場合ならば「〇〇が足りなかった」「〇〇をしておくべきだった」と課題が見え、次に何を頑張ればよいか見えてくるはずです。

理由の2点目は「本気」の力だけが自分の「限界」を超えられるということです。「今はやらないだけ」「次は必ずやる」と言う人がいますが、それではいつまでたっても夢はかないません。本気になって精一杯頑張ることによってのみ、自分の「限界」を超えるような不思議な力が働いて、新しい自分がみえてくるのです。

「前回の全力は、今回の99%。」今、全力を出す者だけが未来をつかみ、夢をかなえるのです。

理由の 3 点目は「全力を出すと気持ちがよい、心地よい気持ちになる」ということです。特にスポーツなど経験することが多いと思いますが、たとえ失敗したとしても、全力を尽くした結果なら後悔は少ないはずです。それは、失敗から多くのことを学ぶことができ、その経験が次の挑戦への糧、勇気の源となるからです。

②「継 続」

この言葉もよく言われる言葉ですが、毎日、昨日より1%頑張ると、1年間でどれだけになると思いますか。計算式だと1.01の365乗。答えは何と元の約38倍です。逆に、昨日より1%頑張らないで99%を1年間続けていくとどうなるでしょうか。0.99の365乗、答えは元の約3%になってしまいます。さらに元の約半分になるまでは、どのくらいなのでしょうか。なんと、約70日となり2ヶ月強で半分になってしまうのです。なんと恐ろしいことでしょう。99%と、100%と、101%、その差はささいな気持ちのゆるみかもしれませんが、その努力の差が大きく未来に影響を及ぼすのです。

③「不 屈」

最後は「不屈」です。生まれたばかりの赤子は、いつでも全力・本気です。立とうとしては転び、泣いて抱っこをせがむなど、失敗することばかりです。しかし、立つことをあきらめようとはしません。粘り強く挑戦し続け、やがて立てるようになり、歩けるようになり、走れるようになっていきます。その「不屈」の精神は、大きくなっても、きっと体の中に刻み込まれているのです。オフになっている「不屈」のスウィッチを、ぜひオンにしてください。自分で切ったなら、自分で入れることも、きっとできるはずです。それでは、充実した冬休みになることを、心より願っています。

最後になりましたが、保護者・地域関係者の皆さま、2学期も大過なく終えることができました。これも皆様のご理解とご協力によるものと感謝申し上げます。感染症予防対策を講じつつ、良い年をお迎えください。

◆普段、なかなかできないことの一つに、読書があります。この冬休み、1 冊でもよいので本を読みましょう。ここに掲載したのは、現在、「第 69 回青少年読書感想文全国コンクール」に東京都代表としてノミネートされている作品です。ぜひ読んでみてください。

令和5年度 東京都中学校 読書感想文コンクール最優秀賞　　書名「スクラッチ」　著者　歌代 朔

「黒く塗りつぶされた絵の中に見えたもの」　　2年 4組　笠原 美礼

この夏私は、今の自分より悲惨な話はないだろうかと考えながら読む本を探していた。私は、五月ごろから体調が悪くなり、学校行事も部活動も参加できなくなってしまったからだ。この本に出てくる健斗と恐らく同じ病気だ。激しい頭痛で起き上がれない。食欲がないのに親は無理に食べさせようとする。今日は起きられるかと聞かれても無理なものは無理。でも言葉を返すほどの体力も気力もなく会話すらできない。家の近くで学校帰りの小学生たちの元気な声が聞こえるころに起きる。一体私は何をやっているのだろう？そんな気持ちで六月、七月を過ごした。

『スクラッチ』に出てくるバレーボール部の鈴音は、中学校生活最後の「市郡総体」が中止になったくやしさで荒れている。美術部の千暁は、「市郡展」の審査が中止になったことで動揺している。それらは吹奏楽部の私にとっての「夏のコンクール」のようなものらしい。私も今年は体調不良で参加できなかった。一年間、コンクールのために練習を重ねてきた。自分のパートの譜読みをして、何度も音源を聞いて練習しているうちに、曲が自分のものになっていく感覚や、みんなで合わせたときの多彩な音が沸き上がってくる瞬間が私は好きだった。一年前のコンクールで演奏した曲を聞き返すと、不思議なくらいあの夏の情景がはっきりと思い浮かぶ。しかし今年の夏には、来年、再来年、数年後に思い返せるはずだった思い出の音がない。「体調不良で欠席」の一言では済まされない、自分の一部がえぐり取られてしまったような傷が残っている。だから部活命の鈴音の涙、叫びにはものすごく共感できる。悲惨さは同じくらいだろうか？だが私はまだ二年生なので、来年にチャンスがある。だから鈴音や千暁の方が悲惨ではないか？

読みはじめはこのように、自分と登場人物の「不幸比べ」をしながら読んでいた。しかし読み進めていくと、コロナ禍における不自由さ・不平・不満体験の羅列がテーマの話ではないことに気がついた。

千暁が鈴音に汚された絵を黒く塗りつぶしていく場面がある。黒く塗ろうと決めた瞬間「僕の頭の中に詰まっていた、垂れこめたもやのようなものの中に、色鮮やかな何かが差し込んだ」とある。そして全部黒く塗り終えたら「不思議なことに、少しずつ、少しずつ、僕の気持ちは落ち着いていった」と言っている。私はこの場面が好きだ。黒く塗りつぶした絵は、コロナ禍で何もかも潰されてしまった心の暗闇の象徴でもあるが、その一方で千暁にとっては本来の自分を取り戻してニュートラルな状態になった瞬間でもあるのだろう。千暁はここから変わり始める。やりたいこと、好きなことを奪われる不自由さは、大げさでなく心の中が真っ黒になる。しかし真っ黒な絵からは絶望だけでなく、力強さや意志も感じ取れる。人は順風満帆なときよりも思い通りにいかないときの方が、真剣に考えて、変わるきっかけを掴むような気がするからだ。そして千暁の黒い絵の下にはきれいな色彩が詰まっている。「誉めてもらうために描いた絵」だと言っているが、それでも真っ黒に塗り替えた後に、その色は形を変えて表情を見せてくれている。私はこれも千暁の本当の姿だったことに違いはないと思っている。

人はいろいろな経験を重ねながら、その時々に感じたこと、悩んだことを積み重ねて生きていく。水害の被災者としての経験を持つ千暁が「被災っていうのは、ずっと続いていくんだな。被害を受けたそのときだけで終わるもんじゃなくて」と言っているように、被災経験も、コロナ禍での不自由な生活も、どこかで分断されて区切りがあるわけではない。ずっと自分の一部なのだと思う。

私はもう一度考えてみた。不自由で真っ暗闇の生活は悲惨なのか。千暁や鈴音の中学校生活は悲惨だったのか。真っ暗闇のなかでも次にどんな色に塗り替えていこうか、と考えることはできる。そしてどんな色に塗り替えていくかは自分で決めることができる。真っ黒に塗られてしまう経験も、その先に続いていく人生に大きな意味を持つのかもしれない。

今、私は自分でも先のことがよく分からない。進路についても具体的になりたいものがあるわけではない。しかし鈴音のように「私は今も突っ走るんだ。ただもうがむしゃらに」という気持ちを持つことはできそうだ。一つずつ、自分の色を選んで塗り替えていこう。自信なく迷う私に、きっと千暁は「いいんじゃない、それで」と言ってくれそうな気がする。